

令和 5 年 6 月 13 日現在

機関番号：16101

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2022

課題番号：19K23270

研究課題名（和文）離農者が現代農山村の持続性に与える影響

研究課題名（英文）The Impact of Farmers Leaving Agriculture on the Sustainability of Local Communities

研究代表者

土田 拓 (TSUCHIDA, Taku)

徳島大学・インスティテューショナル・リサーチ室・准教授

研究者番号：90842196

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、農山村の持続性に離農者がどのような影響を与えているか、個人生活史を通じてその一端を読み解こうとした。調査地である北海道紋別市では、農村部の持続性を考えて行く上で、酪農経営の継承可能性が重要な検討事項となる。しかしながら、フィールドワークを通じて見えてきたのは、自ら望んで積極的に在村離農を選択した高齢者の生活像であり、離農が家族酪農経営の継承に困難をもたらさず一方で、当事者にとって肯定的側面も持っていることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来、農山村の持続性をめぐる議論において、農山村の多面的機能の維持や生きがいに繋がる高齢者農業は肯定的に評価されてきた。一方、農業を継続しないという選択が当事者にとってどのような意味を持っていたかについては、十分に調査研究されてきていない。当事者にとっての離農の肯定的側面も視野に入れ、生活の場としての現代農山村のあり方を多面的に検討していくことの重要性を「在村離農」の実態を通じて示唆した点に、本研究の意義を見出している。

研究成果の概要（英文）：In this study, we aimed to examine the impact of farmers' leaving agriculture on the sustainability of agricultural mountain villages through their personal life histories. In the surveyed area of Monbetsu City, Hokkaido, the viability of dairy farming succession emerged as a crucial consideration for rural sustainability. However, the fieldwork conducted in this study revealed a positive aspect of farmers leaving agriculture, as it unveiled the lifestyle of elderly individuals who actively chose to transition away from farming and portrayed their affirmation of the decision.

研究分野：民俗学

キーワード：離農 在孫離農 個人生活史 ライフヒストリー

## 1. 研究開始当初の背景

少子高齢化が一段と進むなか、中山間地域を始めとする農山村では、後継者のいない高齢農家の離農が増加している。特に北海道は、若年世代の他出の多さ、高齢専業農家率の高さ、三世代農家率の低さ、後継者確保水準の低さなどから、最も経営継承が不安定な地域とされる(細山隆夫 2015 「北海道大規模水田地帯における農業構造変動と新たな担い手展開」『農業経済研究』87-3)。離農自体は今に始まった現象ではなく、北海道の場合、開拓初期より常に向き合ってきた社会課題であった。定着率の低かった北海道移民は、入植後に転出し近距離地域へ再入植を行う場合が少なくなく(平井松午 1991 「第二次世界大戦前における北海道移民の空間移動と定着状況」『地理学評論 Ser. A』64 - 7)。また戦後は、農家の規模拡大を目指した開発投資と政策助成による離農も進んでいる。

このような過去の離農と比べると、現在の離農には、離農後の暮らしの多様化という特徴が認められる。離農者は、離農後もそのまま現住居で暮らし続ける場合もあれば、転出し、家族のもとへ身を寄せる場合、離村後に家庭菜園を営むために元の家に通うことで生活圏が持続していく場合もある。離農の仕方によって離農後の暮らし方、地域社会における立ち位置が異なることから、農山村の持続性に離農者がどのような影響を与えているか、個々の生活経験に即して問い直す必要性が生じている。

## 2. 研究の目的

離農に関する既存の研究は、これまで農家の階層や農地移動の実態など農業構造に関する研究を中心に進められてきており、離農者の追跡調査(天馬征 1980 『離農 その後、かれらはどうなったか』日本放送出版協会)など、一部を除き、離農後の暮らしに対する関心は必ずしも高くなかった。少子高齢化が進行する現状の下で、離農後に当事者がどのような生活経験を重ね、また、地域社会とどのように関わっているかについても、十分な調査研究には至っていない。

そこで本研究では、個人生活史を通じて、離農者が農山村の持続性に及ぼす影響を検討する。具体的には、集落機能との関係性とともに、離農者個人にとって、その地域で暮らすことにどのような意味があるのか、人生を送る「場」としての個人的価値に目をむける。集落機能の維持を目的とした政策的支援は継続的に行われてきたが、もとより個人の人生の充足なしに、集落を持続していくことは難しい。離農者の生活観を自明のものとして丹念に読み解いていくことは、現在の離農現象を捉える上で重要な課題である。

## 3. 研究の方法

新型コロナウイルス感染症の流行状況を鑑み、研究計画を修正しながら、以下の聞き取り調査、資料調査、分析、分析結果の検証を行った。

### (1) 離農者のライフヒストリーに関する調査

戦後、酪農専業化と規模拡大が進んできた北海道紋別市内陸部における離農者の生活史について、聞き取り調査を実施した。また離農者の手記や写真資料をはじめとする個人生活記録の調査を実施した。主な調査内容として、オホーツク海沿岸部特有の流水や海霧をともなう冷涼な気候、開墾作業を困難にする重粘土壌のふたつに代表される厳しい自然条件下での農家の生活戦略、離農のタイミングと要因、離農後の生活様式や社会関係等に焦点を合わせた。

### (2) 離農者の家族のライフヒストリーに関する調査

離農者の生活経験を、家族との関係性という観点から位置づけなおすための調査を実施した。離農者の子息から聞き取り調査を行い、離農という選択に対する家族の評価、家業の継承についての考え方、親子関係、職業選択を始め自身の生活戦略に与えた影響等に焦点を合わせて調査を進めた。

### (3) データの整理と分析

現地調査で得られた音声データに基づきトランスクリプトを作成した。このトランスクリプトに、個人生活記録である離農者の手記、また写真資料等を併せて、離農前後にわたる個人生活史の全体像を把握することを試みた。その上で、離農という選択とその後の生活経験に重点を置いた分析を進めた。

### (4) 分析結果の検証

個人生活史を専門とする研究機関である日本ライフストーリー研究所にて分析結果を発表・報告(土田拓「高齢農家の在村離農 定住と離農のはざまのライフストーリー」2020年)することで、トランスクリプトの解釈を深めた。

#### 4. 研究成果

##### (1) 在村離農という選択とその意味

本研究の目的は、農山村の持続性に離農者がどのような影響を与えているか、個人生活史を通じてその一端を読み解くことにあった。

戦後、北海道では酪農経営の専門化・大規模化が進んできた。調査地である紋別市もそうした地域のひとつであり、農村部の持続性を考えて行く上で、酪農経営の継承可能性が基本的な検討事項となる。しかしながら、フィールドワークを通じて明らかになったのは、自ら望んで積極的に在村離農を選択した高齢者の生活像であった。在村離農は、家族酪農経営の継承に困難をもたらす一方で、当事者の生活の充実に繋がる場合もあったのである(土田拓「高齢期における積極的在村離農の可能性 : 元酪農家のライフストーリーを通して」『生活学論叢』No.40, pp.42-53, 2022年)。

従来、農山村の持続性をめぐる議論においては、農山村の多面的機能の維持や生きがいに繋がる高齢者農業は肯定的に評価されてきた。一方、農業を継続しないという選択が当事者にとってどのような意味を持っていたかについては、十分に調査研究されてきていない。当事者にとっての離農の肯定的側面も視野に入れ、生活の場としての現代農山村のあり方を多面的に検討していくことの重要性を問題提起した点に、本研究の一定の意義を見出している。

また、集落機能との関係性に目を向けてみると、在村離農者は、農業生産にともなう相互補完機能への関わりは薄くなるが、寄合等を通じた自治機能を始め、営農以外の諸機能への関りは維持されることになる。その際、離農以後、集落の範囲を超えた社会集団に参加することで、生活共助機能への関与が深まっている点は注目される。

##### (2) 離農者家族の生活史、特に多様な職業選択の重要性

本研究では、乳業メーカーの従業員や農協職員など、「農家」とは異なる立場から酪農業界に関わる離農者家族の生活史の一端も明らかになった。今後の研究に向けた展望として、他出子と出身村の関係性という視点のみならず、直接的に酪農業の持続に影響するような職業的背景を持つ離農者家族の生活世界と地域社会の繋がりをみていくことの重要性が示唆された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 土田拓	4. 巻 40
2. 論文標題 高齢期における積極的在村離農の可能性 元酪農家のライフストーリーを通して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 生活学論叢	6. 最初と最後の頁 42-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 土田拓
2. 発表標題 高齢農家の在村離農 定住と離農のはざまのライフストーリー
3. 学会等名 日本ライフストーリー研究所
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------